戦時下・戦後３０年の日本精神史・安岡章太郎はこう語った

A 30 Years of Japan's Spiritual History of War and Postwar Yasuoka Shotaro has Recited in this Way

Ahmed Mohamed Fathy MOSTAFA
（カイロ大学）

日本戦後文学史においては、小説家安岡章太郎（1920～）がいわゆる「第三の新人」の一員としてかたづけられる傾向がある。「第三の新人」という呼び方に対する様々な定義があってはっきりしない部分はあるが、強いていえば敗戦後に文壇を取り巻いた思想及び政治的な論争の観点からこれら**「第三の新人」のメンバーに共通する点というのは、政治・思想関心の欠如、批評性の衰弱、私小説的伝統への接近、などと見られ**、あえていわゆる「第一戦後派」や「第二戦後派」と切り離す見方が定着しているようである。

しかし、これまで10年以上、安岡章太郎の数多くの作品を読んだり、その作品をアラビア語に直したりしているうちに、必ずしも安岡章太郎の文学が日本戦後社会を取り巻いていた様々な葛藤から遠ざかろうとしていたとは言えないのではないかと思うようになった。安岡章太郎の文学活動の前半期の数多くの作品をとってみれば、そこには「戦争」がそれとなく影を落としていることがうかがわれよう。それらの作品をひとまとまりとして丁寧に読み直せば、そこに伏せられていると思われる伏線が浮かび上がって来そうな気がする。

この論文では、安岡章太郎が満州事変からいわゆる「15年戦争」を経てだいたい1961年の高度経済成長あたりまでのおよそ30年間の日本の激動期を背景に、つまり自伝を語るという手法でもって『宿題』（時代背景は満州事変の時期）から『家族団欒図』（時代背景は高度経済成長の始まり）までの間の日本社会そして安岡同世代の精神史を語ろうとしていたのではないかという疑問を追求したい。

安岡章太郎文学は思想や政治などとはまったく縁がなく、本人も自分の世界にどっぷりはまった**負け犬で脱落者で社会からの逃亡者**だとよく批評されがちなのである。思想や政治、とりわけ敗戦後日本文壇で繰り広げられた論争にはまったく関心がなかったといわれてきた安岡章太郎はそれでも自分の作品を通して個人の親子関係や友人関係などという身近な関係でもって個人のレベルそしてアレゴリーでもって日本社会全体のレベルにおいて戦争、とりわけ敗戦が残した計り知れないほどの精神的な傷跡を掘り起こしさらけ出して、日本人読者に見せつけたのである。

確かに安岡章太郎にははっきりとした政治的な思想はなかっただろうし、どこの政治活動グループにも属していなかった。しかし、彼が自らの作品で語った諸々の個人的な心情は最終的に当時の日本人同世代の想いを代弁していたであろう。これは政治だとは呼べないのかもしれないが、自分の世代の想いや心の葛藤や悩みを語った安岡章太郎は戦争や戦後当時日本を取り巻いた荒んだ出来事に背を向けていたとは決して言えないであろう。

1952年に発表された『宿題』という作品では、安岡章太郎は自分が小学校5年生のときの思い出を中心にストーリーの構想をたてる。時期はちょうど満州事変前後のときもあって、ランクの高い軍人で獣医でもある主人公「私」の父親が繰り返す内地や外地の長い派遣で留守が多い。そこで**父の「不在」**が主人公のあどけない心に様々な不安を投げかける。この作品が安岡章太郎の一つの個人的な回顧録の始まりであると同時に、これから始まろうとしていた激動期の記録のスタートでもあり、つまり安岡章太郎なりの「僕の昭和史」のスタートでもあったのではないかと思う。もしそうだとすれば、安岡氏はどういうテーマを主題にしてその激動期を記録しようとしたのであろう。安岡氏が書いた膨大な数の作品を殆ど読んできた結果、シナ事変から高度経済成長の始まりまでという 30 年ぐらいの長い時期をカバーするような形で創作されたそれらの作品をおおざっぱに見てみる場合、そのテーマを下記の通りに大きくわけることができよう。

● **戦中期編(シナ事変から敗戦までの15年戦争の間)**

1．少年時代(小学生時代)・植民地の記憶・父の不在・戦争への嫌悪感
『宿題』(1953年)

2．少年時代(中学校時代)・孤独、弱気からの脱出
『サアカスの馬』(1957年)など。

3．青年時代(大学受験・留年時代・父の不在・母の圧迫からの逃亡)・召集令状を待つ学生の心の葛藤・戦争という現実の逃避・悪い仲間の無念さ
『悪い仲間』(1953年)、『家庭』(1954年)、『夢見る女』(1956年)、『肥った女』(1957年)、『青葉しげれる』(1959年)、『相も変わらず』(1959年)、『質屋の女房』(1959年)、『蒸し暑い朝』(1963年)など。

4．青年時代(学徒兵時代)・徴兵・軍隊生活の体験
『科学的人間』(1954年)、『銃』(1956年)、『美しい瞳』(1959年)、『遁走』(1960年)など。

● **戦後編(敗戦から経済高度成長までの15年間)**

5．青年時代(敗戦の体験・鵠沼海岸の時代)・闘病生活・父の不名誉な帰還
『剣舞』(1953年)、『科学的人間』(1954年)、『体温計』(1954年)、『愛玩』(1956年)、『陰気な愉しみ』(1956年)、『松の木のある町で』(1956年)、『鶏と豪蔵』(1956年)、『海辺の光景』(1959年)、『美しい瞳』(1959年)、『雨』(1963年)など。

６．青年時代(GHQ 体制下の接収家屋ガードマンの時代)・被占領者の屈辱感・白人コンプレックスのあらわれ
『ガラスの靴』(1953 年)、『ハウスガード』(1953 年)、『剣舞』(1953 年)、『勲章』(1953 年)、『サアヴイス隊員要員』(1954 年)、『陰気な愉しみ』(1956 年)、『ジングルベル』(1963 年)など。

７．壮年時代(敗戦後遺症の症状)・母親の発狂そしてその死
『故郷』(1955 年)、『愛玩』(1956 年)、『海辺の光景』(1959 年)、『美しい瞳』(1959 年)など。

８．壮年時代(戦中時代と戦後時代との二つの世代の継続と断絶の間)・日常生活の安定化・経済高度成長の兆しの間からときどき覗かれる“戦後”の亡霊
『キリザンショ』(1955 年)、『海辺の光景』(1959 年)、『D 町のにおい』(1957 年)、『猥褻な飲料』(1956 年)、『職業の秘密』(1956 年)、『家族団欒図』(1961 年)、『軍歌』(1962 年) など。

以上のように、作品発表年代の順ではなく、その内容を基にして時代背景の年代的な順番を追っていく形で、『宿題』から『家族団欒図』までの安岡章太郎の小学校５年生（11 歳ぐらい）の時点から父親の再婚（安岡章太郎が 39 歳のとき）までその自伝を整理し直そうと試みたい。同時に同氏はこの自伝を通してその行間から後生の日本人に何を語ろうとしたのか、どのようなメッセージを伝えようとしたのか突き止めておきたい。

● 戦中編

１．少年時代(小学生・中学生)・植民地暮らしの記憶・父の不在・戦争への嫌悪感

『宿題』

植民地時代の記憶・父の不在

1952 年に発表された『宿題』という作品では、安岡章太郎は自分が小学校５年生のときの思い出を中心にストーリーの構想をたてる。時期はちょうど満州事変発生前後のときもあって、ランクの高い軍人で獣医でもある主人公「僕」の父親が繰り返す内地や外地の長い派遣で留守が多い。もっとも、安岡章太郎は物心ついたときから、自分は京城(ピョンソン)、つまり今のソウールに住んでいた。彼は京城内の日本人対象の幼稚園や小学校に通っていた。安岡が９歳のときに親に連れられて本土の青森県弘前市に移り住む。しばらくして 11 歳になったときに東京赤坂区に引っ越すが、近所の青山小学校へ入った。しかし２ヶ月後はまた近くの青山南小学校へと転校する[1]。ここまでが実際に起きたことであるが、『宿題』の話はその時点からスタートするわけである。

1 安岡章太郎編著『日本文学全集 51』河出書房、1971 年、322 頁。

青山南小学校に転校したばかりの主人公「僕」は外地や内地でずっと使っていた様々な訛りをいきなり止めきれず、周りのクラス仲間に馬鹿にされ、毎日のようにそのいじめに遇っていた。そればかりでなく、隣近所の遊び仲間にもときどき殴りかけられたりした。そして、彼はその父親がいないばかりに、母親は父親の分までその監視の眼を光らせ、学校の宿題のチェックを厳しく行うわけである。クラスの担任教官も次々容赦なく宿題の色々を「僕」に押しつけてくる。ストレスのたまった少年「僕」は、とうとう登校拒否状態。「僕」は毎日、学校へ行くふりをしながら近くの霊園の中へ紛れ込んでは時間をつぶしてしまうのだ。どうも、その霊園へ毎日足をはこぶ背後には宿題や学校嫌いだけでなく、“戦争”という現実からの逃避ということもあったようである。なにせ、中国大陸ではじまっていた混乱は父親を自分から奪ってしまったからである。「僕」が毎日通っていた霊園には乃木大将の墓があった。そこには一つの深い意味があろう。そうしているうちに、ある日「僕」は墓場の壁に貼ってあった戦争反対のビラを発見した。それを一生懸命に剥がそうとしていたところへ憲兵につかまってしまった。校長先生のところへ連行された「僕」は叱られるどころか、その校長に褒められているのではないか。結局その最後のひと場面は正夢のようであった。

実は、安岡章太郎が書いた数多くの作品の中でこの作品は1930年代前半当時の幾つかの政治的、社会的な重要テーマを含んでおり、安岡章太郎文学を語るには欠かせないものであると思われる。

『宿題』の冒頭の二つ目のクダリには次の文章がある。

「僕が読み出すと、まわりが変にシーンとなる。しかし、それが僕の四国弁と植民地言葉のごっちゃになったナマリのせいだとは知らなかった。」[2]

上記の原文では、「植民地の言葉」としか書かれていないが、「植民地」とは朝鮮半島の京城のことであるし、「言葉」とはおそらく現地の朝鮮語よりむしろ日本の標準語のことであろう。事実として安岡章太郎は1925年から1929年まで、つまり5歳のときから9歳のときまで両親と一緒に京城に住んでいた。安岡章太郎の回顧録である『僕の昭和史1』では、同氏はあの4年間の記憶について幾つかのエピソードを語っている。それを読めば、当時の日本軍は特に占領地の派遣先でいかに日本体制に優遇されていたことが分かる。朝鮮半島のようなところでも日本人は自分だけの社会を作り、現地の朝鮮人をシャットアウトしていたし差別までしていたことが同じく『僕の昭和史・1』の記事からうかがわれる。

『宿題』を読み通していくと、主人公がクラスメートや遊び仲間にいじめられるいくつかの場面に出会う。これはやはり当時の日本の世間はいかに高官軍人の家族が特権階級で体制に優遇されていることを意識していて彼らのことを白い目でみていたことがうかがわれよう。また、一箇所だけ安岡章太郎は植民地のことをほのめ

2 「宿題」『安岡章太郎全集1』岩波書店、1986年、45頁。

かしたが、その分の比重が小説の流れにいかに大きく影響したことがうかがわれる。安岡章太郎のように自分の幼年時代を植民地で過ごした同世代もしくは次の世代の日本人はずっとその時代の記憶を引きずってきているようである。またこの体験は安岡章太郎の作家精神を形成するには少なからず影響していったと言えよう。後にまた触れることになるが、『勲章』でも道端で出くわした朝鮮人の少年にタバコ１本をゆずってもらったあのエピソードの場合は、安岡章太郎の植民地暮らしという体験を知らない読者ならば何とも思わずに素通りに読み過ごしてしまうが、そのエピソードの意味はかなり深いものだと思われる。次の世代の日本の有名な知識人でも、少年時代に植民地帰りの安岡章太郎のように五木寛之や山田洋次などは本土帰国後にいじめに遇ったことや植民地時代の被支配者に対する後ろめたさを感じたこと、そして故郷の問題というテーマをしばしば取り上げたりする。『宿題』を読むことによってあの時代に朝鮮半島で自分の幼年、少年時代を過ごした日本人軍人の子供たちの大事な精神形成の側面がうかがわれることであろう。

父の不在・戦争への嫌悪感

前述したように、この作品の状況背景としては主人公「僕」の高官軍人である父親の外地派遣は(中国大陸などの戦乱によって)頻繁になり不在が多くなる。この作品を分析するにあたって、おそらく主人公「僕」と母親が二人きりの生活をしているため、この二人の関係に焦点が当てられる傾向があろう。しかしその構図の裏返しを考えた場合、父親の「不在」がかえって浮かび上がってくることであろう。実は父のことが記述された箇所は三箇所だけであって、しかもこの三箇所とも父は実際登場しないままである。

「僕は前に**父と母で西洋料理を食べに行った**ことがある。あとで母は僕の洋食の食べ方がみっともなくてボーイに対して恥ずかしかったと云った。」[3]

「これはどうしても徹夜をする他はない、と僕は考えた。徹夜というのは従兄がよくいう言葉で、非常に威力があるように思えた。もちろん秘密にしなければならないので、僕は寝床の中で**父と母とが寝静まるのを待った**。すっかり音がしなくなったらこっそり起き出して先ず物干し台へ上がって深呼吸しよう。」[4]

「二階の障子の隙間から、怒鳴りあきた子が一人、二人、と散って行くのを見下ろして、ようやく僕は冷たい汗が首筋を流れるのに感づいた。それから二時間ぐらいして母が帰ってきた。**その晩、父は出張して留守だった。**」[5]

戦争によって自分の小さな家庭の生活不安定状態が起き、父とは離ればなれの生活を強いられたので、主人公の反抗や怒りの矛先が“戦争”や支配体制を象徴する担任の教員や校長や母親にまで向けられるようになった。「「戦争絶対反対」。ビラに

3 同上、47 頁。
4 同上、53 頁。
5 同上、76 頁。

はそう書いてあった。(中略)どうして戦争反対なんだろう。(中略)なぜ戦争やっちゃいけないんだ。そうだ戦争がなきゃだめだ。僕は戦争のはじまった日の学校を思い出した。戦争がもっとあれば、先生は兵隊へ行くと云っていた。みんな行ってまえ。重べえも金原先生も原先生も、みんな行けばいいんだ。南学校なんか燃えちまえ。」[6]

この作品の主人公は、戦争を嫌いになったきっかけは決して政治的でも思想的なものでもなく、もっぱら個人的なきっかけで戦争のことを嫌ってしまうわけである。父親や兄弟を戦争に駆り立てられた同じ立場に置かれた数十万も数百万もの同世代の小さい子供や少年たちもおそらくいたことであろう。安岡章太郎は『宿題』という作品では自分が少年であったあのころの同世代の少年たちの気持ちを代弁して切実に語っていたのであろう。安岡章太郎はこの作品を自らの回顧録と同時に自分にとっての「昭和史」のスタート・ポイントとして、彼が成長していく各過程において、その過程の状況を個人のレベルや社会や国のレベルで語り続けていったのであろう。

2．少年時代（中学校時代）・孤独、弱気からの脱出

『サアカスの馬』(1955年)

1955年には安岡正太郎は『サアカスの馬』という作品を発表したが、この作品の時代背景は 1935 年前後の中国大陸における日本軍と中国解放軍との対立の真っ最中であった。気が弱そうで勉強も運動も苦手な主人公のヤスオカは当時の軍国主義国家の権力や弾圧を絵に描いたような厳しい清川先生という教員に責められたりいじめられたりするのである。主人公のヤスオカは清川先生によく校舎の廊下で立たされたり、ときどき「分厚い手のひらが音を立てながら頬っぺたに飛んでき」たりもする。この清川先生のイメージは『宿題』の担任教官の金原先生のイメージにも重なるわけである。この残酷な教官、つまり学校・軍国主義体制に対するあきらめの表現として主人公はしばしば、「まあいいや、どうだって」という決まり文句をつぶやいたりする。しかし、だからといってヤスオカは決して自分の弱気に負けっぱなしだったというわけではない。学校のすぐ裏の靖国神社に張られたサアカスの大テントにいたガリガリの馬の不思議なほどの活気力に自分自身を見出し、自分や同世代の若者たちが置かれた過酷な状況を打開する光がそこで射し込んできたような、というこの作品の締めくくり方であろう。この点において、松原新一氏は「安岡章太郎における戦後の意味」という論文では次の指摘をしている。

「安岡章太郎の描いた劣弱者・落伍者は、実は反抗の形式でもある。(中略) その時代の支配的な動向と合致しない生き方をすること、あえて落伍者となることが、

6 同上、79頁。

外観は消極的にみえて、しかし内実はラディカルな反抗たりえるという場合があるのだ、といってもいい。」[7]

ここで靖国神社が舞台として引っ張り出されたところにもそれなりの深い意味があったのであろう。

３．青年時代（大学受験・留年時代・父の不在・母の圧迫からの逃亡）召集令状を待つ学生の心の葛藤・戦争という現実の逃避・悪い仲間の無念さ

悪化する戦局の中で安岡章太郎は大学受験の落第を繰り返しながら目標をなくした遊び仲間と一緒に東京下町をうろついたり恐怖や不安を逃れてやすらぎやなぐさめを女郎屋で求めようとしたりしたころの精神の葛藤を描いた1951年発表の『悪い仲間』や1958年発表の『青葉しげれる』や1961年発表の『蒸し暑い朝』などがある。1951年発表作品で芥川賞をとった『悪い仲間』では、安岡章太郎は冒頭の文章と締めくくりの文章とをバランスよく配置させ、同作品の時代背景をそれとなくのぞかせてくれたわけである。冒頭の文章は次の通りであった。

「シナ大陸での事変が日常生活の退屈な一駒になろうとしているころ、ようやく僕らの顔からは中学生じみたニキビがひっこみはじめていた。」[8]

そして、作品の締めくくりの文章は次のように書かれている。「そのときの冬から、また新しい国々との戦争がはじまった。」[9]

そして次の過程である学徒兵出陣を描くいくつかの作品が取り上げられる。「赤紙」、つまり召集令状を手渡されてしまう主人公やその遊び仲間の複雑な心境を描こうとした1960年発表の『質屋の女房』や1959年の『相も変わらず』や1957年発表の『肥った女』などがある。『肥った女』では以上の様子が表されている。

「秋の試験休みが終わって、後期の授業がはじまったばかりときだった。新聞に大きく文科系の学生の徴兵延期の特典が取り消しになったことが出た。２月のちに大半の学生が召集されるとわかってからは、毎日がお祭り騒ぎだった。野球の試合や酒場喫茶店の出入りや、その他、戦争中の理由で学生に禁止されていたものが全部いっぺんに復活した。……クラスのほとんど全員がこの一時的な自由を得て、むやみに元気づいたり、ヒステリックになったりした。」[10]

以上の『肥った女』で綴られた入営前の学生たちの一時期的な解禁の様子がまた同作家の回顧録『僕の昭和史』に下記のように述べられている。「ところで、学徒動員が発表されると、しばらくの間、新聞やラジオやあらゆるものが、いっせいに学生を賛美し、同情を示すようになった。学生の遊興飲食はとめられているはずであ

7 松原新一「安岡章太郎における戦後の意味」『国文学・解釈と鑑賞』37，２号（通号461）1972年、２月、90頁。
8 ２に同じ、「悪い仲間」157頁。
9 同上、189頁。
10 「肥った女」『安岡章太郎全集２』1991年、211～212頁。

ったのに、学徒動員令が出て以来、渋谷心新宿の飲み屋は学生服の客でいっぱいになり、酒に酔った学生が肩を組んで高歌放吟しながら歩いていても、街の人たちは見咎めて眉をひそめるわけでもなく、かえって戦前の「自由」な時代が戻ってきたような、何かそんな気分を掻き立てられてでもいるようだった。」[11]

また、『相も変わらず』では同じ召集令状をまもなく届けられようとしていた主人公順太郎の心境について、安岡章太郎は次のことを書いた。「その晩、順太郎は興奮のためになかなかねつかれなかった。兵隊にとられると考えないで、こちらから「行く」と考えることは、何と爽快なものだろう。向こうの方からやってくるのを待たないで、自分の方から何かをしようとしたのは、生まれてこれがはじめての気がする。雨のごとくに弾のふってくる戦場を、一人で駆け抜けて行く自分の姿が目にうかんだ。前進、前進！自分で自分に号令を掛けながら、自分一人で突撃する。そうだ、ピストルをいっちょう何とかして手に入れよう。黒くて、重くて、小さくて、掌にぴったりくる感触、自分のてのひらの中に一個の運命をにぎりしめているというその手応えは素晴らしいにちがいない。むらがる敵を撃ち倒し、最後にのこった一発は自分のためにとっとく。」[12]

また同じ作品の冒頭では、安岡章太郎はわざわざ学徒兵出陣という事態の起こりを予想させる当時の戦争の不気味な圧迫感を思わせる書き方をしている。

「何てことをしちまったんだ。順太郎は自分に云いきかせるようにツブやいた。目の前を黒い自動車が、雨に濡れた轍のあとをクッキリのこしながらとおった。その向こうに見えるのは、重そうな石垣と澱んで冷たそうな濠の水だ。石垣の上には木の間がくれに鉄砲をかついだ兵隊が歩いている。」[13]

また、『質屋の女房』では安岡章太郎は召集令状を受けた自らの生々しい体験を記録しながら、学徒兵出陣前の戦時下の様子を大事なドキュメントとして書き留めておいた。

「世の中は、いよいよ奇妙な混乱をていしていた。ある日、映画館に入り、バドリオ政権ができてから禁止されているはずの「ファシストの歌」をやっているので、おやと思い、出てみると町ではイタリアの降伏とムッソリーニの復権を伝える号外売りが走ったりした。(中略)払底した陸海軍の下級将校をおぎないをつけるために、大量の学生が動員されはじめた。そのころ僕は、質屋で妙な仕事を受け持たされることになった。突然出征した学生が質に入れっぱなしで行った本を、整理することを申しこまれたのだ。」[14]

「何処へ行ってたの、いまごろ」

母親は刺すような眼で僕を見ると云った。(中略)「お前……」と、母は狼狽しな

11 安岡章太郎『僕の昭和史１』講談社、1991 年、206 頁。
12 「相も変わらず」『安岡章太郎全集３』1991 年、126～127 頁。
13 同上、97 頁。
14 同上、「質屋の女房」216 頁。

がら呼んだ。「これをごらん、夕方きたんだよ」

「差し出されたのは、召集令状だった。12 月 12 日、高崎の歩兵聯隊に入営するように指示されている。あと一週間の猶予だ。一週間、何をする暇もなくなった。毎日、まだこんなに知り合いや、親戚がまわりに残っていたのだろうかと思うほど、入れかわり立ちかわり、波がよせるようにいろいろのひとがやってきた。入営の前日は、おふくろまでがすっかり取り乱して、やってきた親戚の連中が寄り合って食事の支度や何かをするさまを、ぼんやり眺めている。」[15]

また、『子共部屋』(1960 年) では、クラス仲間を先に学徒兵にとられて自分も赤紙の到来を待つ大学生たちの不安や苛立たしさを取り上げたし、赤紙がくる前は仲の悪いクラスメイトでも、それが届いてから付き合いし出したという不安や恐怖のせっぱ詰まった状況の中、連帯感で結ばれた当時の学徒兵たちの様子が描かれた。

そして、『家庭』(1954 年) という作品では、安岡章太郎は別の角度から、召集令状を受けてから入隊するまでの間の学徒兵になろうとしている一人の青年の複雑な心境について語っていく。これまで戦争の緊迫した東京の空気を紛らそうとして 20 歳を過ぎたばかりの受験生徒たちと心の防空壕たる喫茶店や女郎屋をうろついていた主人公はふと自らの家庭のことを振り返り家庭の大切さを思い知った、という筋書きなのである。冒頭の文章はこの趣旨を述べている。

「入営の前日まで僕は家庭というものを考えてみたことがなかった。僕にとって家庭はただ何かしら重苦しい、他人に見せては恥ずかしいような、汚れたモモヒキやサルマタのように、しかたなく自分にくっついている何かのような気がしていた。(中略) ところが入営の前夜、寝床につく間際になって、どうしたものか僕は急に友人たちがうとましくなりはじめた。(中略) これまで見当ちがいの愛情で僕を悩ませてばかりいた母のことがにわかに自分の分身として与えられ、そういったものから引きはなされると、もう自分が自分でなくなるような気がした。」[16]

こうして、安岡章太郎の作品に登場する「僕」とか「順太郎」という主人公たちをはじめ、そのワルイナカマたちが学徒兵として軍隊に駆り立てられてゆき、それぞれ内地や外地へと配属されていくのである。この流れの自然な続きとして今度の作品の主人公は入営生活の体験について語るわけである。その作品とは『遁走』である。

4．青年時代（学徒兵世代）・徴兵・軍生活の体験

安岡章太郎の入営は 1944 年 3 月 20 日と決まっていた。その日までの僅かな時間のことを同氏が『僕の昭和史』では下記のように述べた。

「実際に僕は正月早々から不幸な気分であった。それから 3 月 20 日の入営まで、

15 同上、220 頁。
16 2 に同じ、「家庭」285～286 頁。

どのようにして過ごしたか、もはや僕には記憶はない。（中略）何も出来ないまま、いたずらに時日の経過して行くのをジリジリと待っている毎日であった。（中略）六本木の電車停留所から六部隊の営門までは、せいぜい三百メートルぐらいのものだろう。しかし、その距離は僕には無限に遠かった。手を握って別れ、入隊者の群れの流れに入って、やがて営門をくぐろうとすると、徴兵がそばに寄ってきて、いきなり僕の学生帽のツバをぐいと引き下げた。「きょうから軍人だぞ。帽子ぐらいはキチンとかぶれ。そんなにアミダにかぶるんじゃねえ」。その瞬間に、僕は眼の前が暗くなり、曇天の空が頭の上へ落ちてきたようだった。」[17]

結局、安岡章太郎はこうして1944年3月20日に東部第六部隊に入営し、営内では宿泊することなく、神宮外苑の日本青年会館に移動して、一週間ばかり待機した後、北満孫呉の満州981部隊に送られた。同年8月に同氏は40度以上の高熱を発し脊椎カリエスで現地入院した。翌日、部隊の仲間はフィリッピンへ移動され、レイテ島で全滅した。このように実際に起きたことを安岡章太郎は『遁走』という作品に書き留め、主人公に「安木加介」を設定しておいた。この作品では安岡章太郎は、数十万人の学徒兵を代弁して当時の過酷な入隊体験を回想的に書き留めた。「軍隊とは、考えてはならないところである」という箇所はとても印象的で、この作品の中心的なテーマの一つでもあると考えられる。

『家庭』（1954 年）の内容は以上区分けしたいわゆる「召集令状を待つ学生たちの心の葛藤」の過程と「徴兵・軍生活の体験」の過程、両過程に跨るようなものである。冒頭の１、２頁は前者の過程をカバーしながら、後はこの短編のほとんどが主人公「僕」の入営生活に関わっている。この作品の主人公も『遁走』と同じく「安木加介」になっている。『遁走』のようにここでも主人公は入営中の過酷なほどの体験について回想的に語り、自分が上官や古兵に殴られっぱなしの身分になっていることとか、兵隊同士の憎み合いのことなどに触れた。しかしこの作品の中心テーマは営舎の中の厠（かわや）のことである。主人公安木加介は、営舎の食事のまずさにも拘わらず何時しか食いしん坊になり、お腹を壊してとうとう下痢を患ってしまう始末。この趣旨を表す印象的な幾つかのクダリがある。

「この下痢するあとから食べたくなる食欲を自由への欲求であると考えるにいたった……僕は二十六時中完全に束縛されている。あの二階の寝台から見下ろしている古兵の眼によって、おそらく独房の囚人よりも完全に監視されている。（中略）三尺四方の区切られた一角のなかで僕はあらゆるものから解きはなされてしまうのである。ある甘さをもった臭気のただよう薄暗い空気のなかでしゃがみこむと僕はもう、自分と自分の胃袋と腸との他に何ものもない気楽さと安堵のなかに溺れるように入り込んでしまう。（中略）隊列にいない僕をさがすために銃剣の音をガチャガチャさせながらやってきた浜田伍長の、「おーい、安木。安木いないか。いたら出てこ

17 11に同じ、215～216頁。

い。」と呼ぶ声を聞きながら、僕は自分の家の茶の間に居座ったまま、押し売りか御用ききの声でもきいているように、ゆっくり立ち上がった。」[18]

以上の箇所は前述の『宿題』や『サアカスの馬』や『肥った女』にも重なり合う共通点が見られよう。これはつまり「戦争という現実からの逃亡」や「軍国主義体制の抑圧からの解放」というほぼ表裏一体の過酷な現状に対する拒否や抵抗の表れだと思われる。『宿題』における毎日の霊園通い、『サアカスの馬』での靖国神社境内のサアカス大テントへの通い、『肥った女』や『悪い仲間』や『蒸し暑い朝』などのワルイナカマ・シリーズにおける裏通り町の赤線通い、そして『家庭』における厠での閉じこもりなどはすべて当時戦時下の特に安岡章太郎同世代の学徒兵たちになった青年たちの共通した「戦争」という厳しい現実からの逃避、心の防空壕を求める必死の願望の気持ちを暗示しているのではないかと思われる。また、『宿題』や『サアカスの馬』や『家庭』などに登場する金原教官や清川先生や浜田伍長などの軍人や軍人めいた教諭はにわかに戦時下の国家権力を示唆しているように思われる。

他に、軍生活体験を語る主人公安木加介もの、上官浜田伍長もののシリーズとして『銃』(1956 年)もある。『科学的人間』(1954 年) の中心テーマは基本的に主人公の「僕」、言い換えれば実際安岡章太郎自身の体を蝕んだ脊椎カリエスが深刻化していく過程の詳細な描写であるが、冒頭の部分では軍生活体験に振り返るフシがある。そこでは安岡章太郎はまた印象的な書き方で戦争中軍事体制下の一人の兵隊の命がいかに値打ちのないちっぽけなものであったことを述べている。

「軍隊内で一人一人の兵隊の生命がひどく安く値踏みされていることは事実だ。よく言われるように、兵隊は一銭五厘のハガキ一枚で招集されるから、それだけの値打ちしかないという考えは、根も葉もないというわけではない。一頭の軍馬、一ちょうの小銃に較べて、兵隊一人の値段はたしかに安いのである。いや、一銭五厘ではないにしても、戦力的な価値として一人の兵隊は一ちょうの軽機関銃に及ばぬものと考えられることは、現実の問題としてしばしばある。」[19]

● 戦後編（敗戦から高度経済成長までの 15 年間）

5．青年時代（敗戦の体験・鵠沼海岸の時代）・闘病生活・捕虜となった父親の不名誉な帰還

『剣舞』(1953 年)、『科学的人間』(1954 年)、『体温計』(1954 年)、『愛玩』(1956 年)、『陰気な愉しみ』(1956 年)、『松の木のある町で』(1956 年)、『鶏と豪蔵』(1956 年)、『海辺の光景』(1959 年)、『美しい瞳』(1959 年)など。安岡章太郎は『僕の昭和史・１』では、「大袈裟なことを言っていると思われるかもしれないが、後年、戦争のきびしくなった頃、僕らは実際に二、三ヶ月の生まれ月の違いが生死の別れ目

18 ２に同じ、「家庭」295～296 頁。
19 同上、「科学的人間」280～281 頁。

になるという妙な運命にあわされた。まして一年二年という年齢の違いは、平時の十年二十年に匹敵する差違を、われわれ日本人同士の間にも生むことになったのだ。」[20]と述べているが、ここでは安岡章太郎がこの激動期の昭和史を語っていても、これは事実として一般的に戦争を青年時代に体験した安岡章太郎の同世代の精神史であるとしても、厳密にはこれはむしろ安岡章太郎と同じように、そして同氏の作品に登場する「順太郎」や「安木加介」のような学徒兵となった数十万人のほぼ共通の体験をした当時の日本の若者たちの精神史になろう。しかし敗戦の時点から先は学徒兵となって生き残った20代前半の青年たちにしても、学徒兵の身分ではなかった同じ年代の若者にしても彼らはもっと広い形の共通の体験を味わっていくのである。これはやはり、失業問題、貧困、食料危機という現実の日常的な問題のほかに、天皇や国家や父親世代に対する不信感、自分自身に対する自信喪失感、占領という事実が生んだ衝撃や心やプライドの傷、アメリカ人に対する劣等感、将来への不安などの数え切れないほどの入り交ざった精神的な問題を、おそらくその年代の若者たちが分かち合ったことであろう。また、そのなかでそれぞれは個人のレベルでは度合いや状況の違った戦後の体験をしてきているわけである。特に敗戦を迎えた状況や背景においてはおそらくそれぞれは特別な想いや記憶を胸に抱いているのであろう。

闘病生活

安岡章太郎は東京で敗戦の日を迎えたのである。安岡は配属地北満孫呉で高熱を出し脊椎カリエスを患ってから本土大阪陸軍病院へ搬送された。その後大阪はまもなく大空襲にさらされてしまったので、今度はほとんどB29の的にされなかった金沢のある病院へまた移動させられた。これは6月はじめごろだったが、7月1日に退院命令を受けたと同時に現役免除ともなった。

ちょうどそのとき、安岡の東京にあった家は空襲で焼かれていたので彼はしばらく金沢で足止めされてしまった。衣類をもって迎えにきてくれた母親と一緒に7月13日あたりに東京へ帰った。安岡と母親は市川にある安岡の叔父の家へ身を寄せた。8月15日の夜、安岡がその家に帰ったとき、叔父から戦争が数日以内に終わることを知らされた。その瞬間、あれほど戦争が終わることを熱望していた安岡は、南方戦線にいる父親のことが気になった。これは、父親が自決するかどうかというより、これから自分と母という家族の経済的な負担が自分にかかってくると思ったからである。終戦を迎えた状況については『僕の昭和史・1』にこう書いてある。

「市川駅までくると、また空襲警報が出て、しばらく駅の構内で足止めをくったが(中略)亀戸までくると、車掌が臨時停車するから乗客は全員下車するようにと言いに来た。焼け落ちて屋根もないプラットフォームの電柱にスピーカーが着けてあ

20 11に同じ、9頁。

り、乗客はそのまわりに集まった。はじめてきく天皇の声は、雑音だらけで聴き取り難しかった。それが終戦を告げていることだけはわかったが、まわりの連中はイラ立っていた。(中略)母親は赤ん坊を抱えて電車に乗った。(中略)母親は、白いブラウスの胸をひらいて赤ん坊に乳房を含ませたが、乳の出が悪いのか、赤ん坊は泣き続けた。その声は、ガランとした電車の内部に反響して先刻よりももっと大きく聞こえた。……もっと泣け、うんと泣け。僕は、明け放った車窓から吹き込んでくる風に、汗に濡れた首筋や両頬を撫でられるのを感じながら、心の中でさけんでいた。」[21]

こうして安岡章太郎は終戦の日を迎えた。以上の場面で安岡章太郎は赤ん坊の泣き姿を比喩にとって、これから始まろうとする長くて重苦しい自分にとって、自分の世代にとってそして日本にとっての戦後の道のりの様子を先駆けていた。もっとも敗戦前後の様子、特に自分の病気の悪化を描写した作品のなかで、先ほどすでに触れた『科学的人間』(1954 年)が挙げられる。発病の状況について下記のように語った。

「昭和 19 年８月、私は満州とシベリアの国境にちかいＳというところで発病し、左湿性胸膜炎の診断を受けた。それは、たまたま私の属する部隊がフィリッピンに向かって出発する三日前のことである。私はほとんど夢みごこちであった。42 度ばかり発熱して、立って歩いていても、地面を踏んでいるのか何処を踏んでいるのか、よくわからないのであるが……」[22]

安岡は主人公「僕」の口を借りて長々とこの病気の症状について述べていく。そして自分の背中の痛み方を次のように述べた。

「ついに 26 時中、睡眠中にさえも激痛に眠りをさまたげられることになった。……それは歯痛の痛みによく似ており、奥歯が痛むときのように、背中全体の歯の何十倍の痛さでいたみ出すのだ。」[23]

また、『海辺の光景』(1959 年)では回想的な(フラッシュバックの)手法でところどころ主人公「信太郎」を通して安岡章太郎は実際自分が戦後からずっと何年も患った脊椎カリエスのことについて触れた。

「信太郎は軍隊でかかった結核がなおらないままに寝たっきりだったし、母親は白髪がふえた。けれども、ともかくもう戦争はおわったのだ。母は息子の病床につきっきりで看護にあたることができたし、信太郎は病院内にもつきまとっていた点呼や号令やさまざまの罰則から開放されていた。」[24]

『美しい瞳』では、主人公「私」は終戦３、４年経っても兵役中に患った脊椎カリエスがなかなか治らない。病気の体に失業もしている状態であった。似たような

21　２に同じ、258～259 頁。
22　同上、「科学的人間」382 頁。
23　同上、384 頁。
24　１に同じ、「海辺の光景」22 頁。

不幸をもった若者は当時どれほどいたことか想像もつかない。

一方、『愛玩』(1956 年)では、安岡章太郎は戦争中に罹った脊椎カリエスの悪化の有様を語りながら、この病と敗戦の精神的な後遺症とを表裏一体のものとしてその関連性を抽象的に仄めかしながら、自分にとっての“戦後のはじまり”を訴える。この小説の時代背景は 1946 年の夏あたりとして設定されている。これは、終戦当時南方戦線で捕虜となっていた父親が釈放され安岡と母親が叔父から借りていた鵠沼海岸の家に帰ってから(5 月)すぐのことであろう。父親は無論軍人としての職を失い収入を打ち切られた状態で、母親は必死にヤミの商売を試みながら精神的には様子がおかしくなっていくし、一方安岡、つまりこの作品の主人公たる(僕)は脊椎カリエスで胴体をギブスのコルセットで固められて身の動きが取れない状態で布団で二六時中寝込んでいる。

この家庭の経済的な危機を打開しようとして父親は家の中へ数羽のウサギを持ち込んで飼おうとする。しかしこれが「僕」をイライラさせる。

「僕は夜半に、枕もとから駈け込んだ物凄くずう体の大きなネズミに足か頭かを齧られている夢で目をさます。……いちど眼をあけたが最後だ。こんどは本物の魔物が僕を食いにやってくる。ムズムズしたふとんの中につっこんだ足さきから、なんとも云えないクスグッタさが這い上がってきて背骨の患部にはいり込む。すると身体につけているかぎりのものが僕をガンジガラメにしはじめる。ギブスをはずしてシャツをめくって、ぽりぽり背中を掻いてみるがムダだ。クスグッタさは奥の方へ逃げ込んでしまう。(中略)背中のクスグッタさはますますひどくなる。そいつは混沌とした無秩序な部屋の、ホコリや、ぼろ布や、鼻汁だらけでほうり出してある紙クズや、そんなものから沼地のメタンガスのようにブクブクわき上がっては、みな僕の身体のなかに這入りこむらしい。掻けもしない奥の方にあるクスグッタさを我慢するために、僕はただ満身の力をこめて体を硬直させている。」[25]

ここではまるで家中が敗戦後の日本の縮小図になったような感じで、敗戦後の日本を取り巻いた無秩序や国民の無能さが主人公「僕」の苛立たしさを増し、背中の患部を一層悪化していくばかり、という作家のこの作品の趣旨を仄めかすようにみえる。こうして**安岡章太郎は自分の身のヤマイでもって自分の敗戦後の無能さを表現しようとしたと思われる。これでも彼は戦後の廃墟から必死になって這い上がろうとする自分と同じような深いキズを負った日本国民の無能さややるせなさをアレゴリー的に表現しようとしたことであろう。**

そして、戦争ではケガもしないのに、ただ派遣先の北満孫呉で脊椎カリエスを患って現役免除になっただけで国の援助金を毎月支払われていくというウシロメタさに駆られた敗戦後の病体の主人公「私」はその惨めな想いを『陰気な愉しみ』(1953 年)で綴った。

25 同上、88～89 頁。

捕虜となった父親の不名誉な帰還

前述のように、安岡章太郎の父親が南方シンガポール戦線の捕虜収容所を引き上げて日本に帰還したのは1946年の５月だった。それまでに戦後の経済危機や自分の体の不自由さにもかかわらず、**戦争が終っただけで安岡章太郎は自分が解放された自由奔放な気持ちに甘んじていた。それが帰還した父親が６年ぶりに鵠沼海岸の借家の敷居を跨いだ瞬間からどこかへ吹っ飛んでしまったのだ。**敗戦の重々しさ、自分の戦後のはじまりを安岡章太郎が肌で感じたのは、1945年８月15日よりむしろその日からであった。『海辺の光景』(1959年)には回想的に安岡章太郎は主人公「信太郎」の口を借りて以上のことについて語っている。

「終戦の日から翌年の五月、**父親が帰還してくるまでが、信太郎母子にとっての最良の月日であったにちがいない。**信太郎は軍隊でかかった結核がなおらないままに寝たっきりだったし、母親は白髪がふえた。けれども、ともかくもう戦争はおわったのだ。母は息子の病床につきっきりで看護にあたることができたし、信太郎は病院内にもつきまとっていた点呼や号令やさまざまの罰則から解放されていた。(中略)「アスカエル、シンキチ」という電報のとどいたことも、それだけでは旅行からかえってくる夫や父を迎えるのと同じだった。翌日、玄関に立った信太郎は、顔を合わせると、「やあ」とだけ云って恥ずかしそうにうつむきながら、将官用の脚にぴったりと吸い付く長靴を不器用な手つきで脱ぎ出す父を見たとき、はじめて得体のしれない動揺がやってきた。(中略)それは奇妙なものだった。父親というよりは遠い親戚のようにも思えた。(中略)いってみれば信太郎と母とは、**父親の帰還ではじめて敗戦を迎えたわけだった。**それまで彼等は、何の根拠もなしに自分たちは月給でくらして行けるものだと考えていた。」[26]

同じく、『海辺の光景』では、父親の不名誉な帰還をシンボリックに描いた次のクダリがある。

「終戦の翌年だった。父は**階級章を剥ぎ取った軍服**に、革製のふしぎな型のリュックサックを背負った姿で、南方から送還されてくると、屋敷の一隅で捕虜収容所の生活をはじめた。」[27]

また、『剣舞』では父親の帰還について似たようなことが書いてある。

「終戦のよく年、父は仏印から帰ってきた。父がいたとき住んでいた世田谷の家は戦災にあって焼けており、僕らは母方の叔父にかりた鵠沼の別荘で父をむかえた。革制の、長持のように大きなリュックサックを背負った父は、玄関で僕に顔を合わせると「やあ」とだけ云って恥ずかしそうにだまってしまった。**十幾年ぶりでいっしょに暮らしてみると、父というよりは遠い親戚のようであった。**親戚の老人が上京した途中で「ちょっと、よせてもらいます」と云った感じなのだ。」[28]

---

26 同上、「海辺の光景」22～23頁。
27 同上、11頁。
28 2に同じ、「剣舞」194～195頁。

『愛玩』(1952 年) では父が南方戦線から引き上げて帰ってきた様子がもっともリアルに描かれた安岡章太郎作品の一つであろう。その父親が帰ってきた様子はあまりにも軍上官だった彼らしい面影はどこにも求められなかった。

「軍人だった父は、獣医官だったのでどうやら戦犯にもならず、無事に南方から引き上げてまる四年になるのだが、あちらでの抑留期間中よほどおどかされたものか、外で袋叩きに合うことを警戒しているように、この鵠沼の家の門からほとんど一歩も出たことがない。」[29]

何かの恐怖感に戦くこの情けない父親の姿はどうも、主人公「僕」の目にはあのイヤラシイ動物たるウサギと重なってしまうところがあるように思われる。父親がウサギを飼っているうちにいつしかその顔まで似てきてしまったというクダリさえ認められる。「僕」がこのウサギを嫌う原因の一つとして、「あんなに重そうな音をたてて暴れるくせに、あいつらは何だってあんなタヨリない声で鳴く」からである。やはり、父親の姿、いや敗戦前の日本の軍事体制のイメージがここで浮かび上がって来そうな気もする。それだけでなく、主人公にとっては**ウサギの「タヨリない声」は天皇陛下の声さえ思わせてしまうらしい**。「ウサギは「キュウ、キュウ」と云って鳴くのである。この鳴き声をきくと僕はなんだかガッカリする。……陛下のお声をはじめてラジオできいたときのような、ある空しさがやってくる」、とあるようにここでは**ウサギ、父親、敗戦までの日本軍事体制、昭和天皇のタヨリなさが四重に重なり合ってみえる。しかし考えてみれば、そこにも病体の主人公「僕」のタヨリなさも浮かび上がってくる**。安岡章太郎はこうして敗戦を体験し、親の世代の頼りなさに絶望しながら将来に対して不安を抱いてきた 20 歳代の日本の若者達を代弁して切実にこの作品を綴った。これは**日本戦後のムナシさを絵に描いた**ような、安岡章太郎の最も優れていて骨太い作品の一つとして数えられよう。

6．青年時代（GHQ 体制下の接収家屋ガードマンの時代）・被占領者の屈辱感・白人コンプレックスのあらわれ

被占領者の屈辱感

杉本和弘氏は「安岡章太郎の〈アメリカ〉・初期小説を中心に」という論文では次のことを言っている。

「安岡の小説は、占領軍（＝アメリカ）が作り上げようとした、〈正しいアメリカ〉、〈立派なアメリカ〉、〈よいアメリカ〉のイメージとは相反するような占領軍やアメリカを描く。かといって、〈邪悪なアメリカ〉、〈非道なアメリカ〉を描こうとするものでもない。（中略）安岡のテクストが前景化するのは、占領軍やアメリカに対する反感や憎悪ではなく、**敗戦国民であるという苦い認識と、占領／被占領、支配／被**

29 同上、「愛玩」86 頁。

支配という状況に対する違和や嫌厭の思いなのである。」[30]

以上のように、『陰気な愉しみ』、『ガラスの靴』、『ハウスガード』、『勲章』、『愛玩』などを読んでみた場合、安岡章太郎はこれらの作品に登場する主人公たちを通して被占領者としての屈辱感を表現したといっても、必ずしも彼は主題として占領者つまり支配者たるアメリカやアメリカ軍の非道や醜さを取り上げたわけではないことが窺われよう。『ハウスガード』では、主人公「僕」は色々なシチュエーションで被占領者としての想いを表現した。生活の糧を維持するために GHQ 接収家屋のハウスガードのアルバイトを余儀なくするようになった「僕」はあるきっかけで自分がまるで自分の「ハウス」、つまり**自分の国日本を占領者アメリカのために自ら「ガード」をしてしまうというこの上もない屈辱に満ちた状況に置かれてしまうような想いに駆られてしまう。**アルバイトをはじめた頃の「僕」はあんなに楽しく暇を持て余していながらいいお手当てをもらって喜んでいたのに、何時しか被占領者である自分の惨めさに目覚めたのだった。

「一日一日とまわり中から腐って行く建物のなかに閉じ込められていることが、いかにナマケモノの僕にとっても我慢のならない不快なものに思われてきた。」[31]

また、『ガラスの靴』では、主人公「僕」はハウスガードとして登場しないが、留守中のアメリカ進駐軍クレイゴー中佐の接収家屋となっている豪華な屋敷へ毎日のように潜り込んでは、そこでメイドとしてやとわれている悦子と楽しく遊んだり美味しい物を食べたりする。彼はそのうちまるで我が家にいるような気持ちで平気でその家へ出入りするが、予定より早くクレイゴー中佐ご夫妻がもどってくると彼は現実に目覚める。やはりこの家、つまり日本はもはや自分の家ではなくなっているし、**その屋根のしたで大和撫子と自由に恋さえできなくなるという現実に目覚めたとき、被占領者の屈辱の気持ちが余計つらくなっていく。この二つの小説は戦後の日本の若者、いや日本人みなの精神史の大事な一ページをリアルに語っているのではないかと思う。**

また、アメリカではなく、『勲章』では主人公「僕」は自分が敗者としての当時の在日朝鮮人に対するある種の屈辱感を感じてしまう。これは、敗戦まもなく東京都内の電車駅で行き合った見知らぬ朝鮮人の少年にアメリカ製のタバコをもらったときのことだった。

「十四五歳の、一見してそれは朝鮮人の少年だった。見れば彼は封を切ったアメリカ・タバコ袋を僕に差し出している。……何のことかわからなかった僕は、了解すると同時に狼狽して、(中略)あの朝鮮少年とのことがあって以来、服装にしろ何にしろ、もう望もうとか、選ぼうとか云う気を、またもやすっかり失ってしまった僕は、職業についても別段何をやりたいとも思わなかった。」

---

30 杉本和弘「安岡章太郎の〈アメリカ〉・初期小説を中心に」『名古屋近代文学研究』16 号、1998 年 12 月、171 頁。

31 2に同じ、「ハウスガード」134 頁。

ここでは、**安岡章太郎が幼年時代に朝鮮で暮らした占領者としての立場が皮肉にも逆転した想いを語っている。**

白人コンプレックス

日本がこうして外国の大軍によって占領されるのは史上はじめてということで、その分日本国民に与えられた衝撃は甚だしいものだったであろう。ましてやその占領軍の兵たちが同じ黄色人種ではなく、**体格や肌の色や言語圏のまったく違ったアメリカの白人や黒人だからこそそのショックが大きかったに違いない。**その衝撃の反応が安岡章太郎をはじめ複数の日本人小説家の戦後作品に表れるのは自然な成り行きであろう。特にその衝撃の反応が認められるのは、安岡章太郎や小島信夫や野坂昭如等の作品なのである。**占領軍という現実にアメリカ人の体格の大きさという圧倒さを加えると、日本人は被占領者として屈辱感や劣等感をいっぺんにダブルパンチ風に受けたインパクトが想像されよう。**安岡章太郎の『陰気な愉しみ』では以上のような劣等感、もしくは白人コンプレックスを思わせる名場面がある。

「私は大廻りして、別のもっと幅の広い通りも歩く。そこは外国人相手のみやげ物屋やレストランばかり並んでいるので、私は買い物や食事をしている外国人をながめる。……写真機をいじくっているアメリカ兵の後に立って、お尻でつきとばされるのは、ちょっと好いものである。しかし、もっと好いのは、日本人のボーイに送られてレストランから出てくる家族づれを見ることだ。(中略)実際、彼等はたしかにわれわれとは人種がちがう。そばにいる**ボーイは彼等にくらべるとまるで猿だ。**そして私はそのボーイよりまた一段下なのだ。」[32]

『ハウスガード』にも主人公の白人に対する劣等感を思わせるような長い部分がある。しかしここでの対象はアメリカ兵ではなく、ソ連人であった。これはモスカリオフという日本語のできるソ連領事館の工作員ではあるが、自分が主人公に行動を監視されているのではないかという誤解に駆られて、接収家屋でロマンチックなひとときを楽しもうとしていた主人公とガールフレンドのメイドのいるところへ押し入って主人公に暴力を振るう。主人公はさすがにその対立で屈辱感を味わいながら、体格の大きい迫力のある白人に対するコンプレックスに目覚めてしまう。

7．壮年時代（敗戦後遺症の症状）・母親の発狂そしてその死

『海辺の光景』をはじめ、『愛玩』、『故郷』、『美しい瞳』、などでは、敗戦後、特に「父親」が南方戦線から復員して鵠沼海岸の借家に来て家族といっしょに6年ぶりに生活を送り始めてから、母親の精神的な様子がおかしくなっていく過程が取り上げられている。『故郷』では下記のクダリがある。

32　2に同じ、233～236頁。

「**母の狂気は突然起こったものではないらしい**。しかし、それがハッキリと僕らに感じられたときは、やはり突然の感じだった。僕らが終戦後のもっとも苦しい数年間を送った鵠沼海岸の家を引きはらおうとする間際のことだ。すべての荷物を発送しおわって、その晩は東京の郊外の親戚の家へとめてもらい、あくる朝、父と母とは高知の伯父の家へ、僕は東京の友人の家の一室へ、それぞれの生活に出発しようとするときになって、急に母の持っていたはずの小型のスーツケースがどこかへ消えてしまった。（中略）母は急に、「え？」と、眼をキョンとみひらきながら下を向いて、足下のプラットフォームの下を流れるレールをキョロキョロと不思議そうに眺めているのだ。……そのときから母は完全に常人ではなくなってしまった。」[33]

上記のような、似たような箇所がまた『海辺の光景』にも認められる。『海辺の光景』では、主人公の母親の発狂の原因について下記の記述がある。

「なるほど、夫の信吉は内地にいるときでも留守勝ちであり、生活を保障されて、息子と二人でくらすことの多かった母は、家庭の主婦としてはきわめて気楽なものだったにちがいない。だが、それは何も考えない生活というものとはちがうはずだった。**原因はむしろ、そうした気楽なくらしと、戦後の逼迫（ひっぱく）したそれとのクイチガイ、それにたまたまその時期に生理的に変調をきたす更年期がぶっつかったことによるのではないかと思われた。**」[34]

結局、田舎高知に帰った母親はあれからずっと痴呆症が悪化していくばかりで、とうとう 1956 年に『海辺の光景』の舞台にもなった高知の精神病院に入院してしまう。そのときは安岡章太郎はすでに脊椎カリエスも治り、結婚もして長女治子も生まれていて、尾山台ではやっとマイホームができた頃であった。一見して、これで安岡章太郎の**戦後**が終ったように見えるが、**敗戦後の逼迫した苦しい数年のことが原因で発狂した母親の存在がなかなか安岡の心では戦後を終焉させることをまだ許していなかったようだ**。そこで母親があの精神病院で息を引き取ったあとの主人公「信太郎」の想いや不思議な行動に対して説明が付くのではないかと思われる。

「すべては一瞬の出来事のようだった。医者が出て行くと、信太郎は壁に背をもたせ掛けた体のなかから、**ある重いものが脱け出して行くのを感じ**、背後の壁と“自分”との間にあった体重が消え失せたような気がした（中略）さっきまで、あんなに変型していた彼女の顔に苦痛の色がまったくなく、眉のひらいた丸顔の、十年もむかしの顔にもどっているように想われる。（中略）—**要するに、すべてのことは終ってしまった**—という気持ちから、いまはこうやって誰にも遠慮も気兼ねもなく、病室の分厚い壁をくりぬいた窓から眺めた“風景”の中を自由に歩きまわれることが、たとえようもなく愉しかった。頭の真上から照りつける日射しも、いまはもう苦痛ではなかった。着衣の一枚一枚のすみずみまで染みついた陰気な臭いを太陽の

33 同上、「陰気な愉しみ」146 頁。
34 1 に同じ、「海辺の光景」17 頁。

熱で焼きはらいたい。海の風で吹きとばしたい……」[35]

以上のクダリを見るとわかるように、安岡章太郎＝信太郎にとっての母の悲しみというありふれた極自然な息子の母親の死に対する感情よりも、母の死によって自分の胸にずっと十何年もの間にのしかかっていた戦後の亡霊が消え去ったという開放感の重みの方が支配的だった。『海辺の光景』が発表された1959年の翌年、つまり1960年に安岡章太郎はこの作品に対して高い評価を受け、芸術選奨賞と野間文芸賞両賞を受賞した。この状況について島居邦朗氏は次のコメントを書いた。「この「海辺の光景」の扱われ方は、いろいろな意味で時代を象徴するものであったと考えられる。昭和35年はいわゆる高度成長のはじまりの年である。この年暮に池田首相は所得倍増計画を発表した。またこの年「三種の神器」という流行語が生まれ、家電製品が一般家庭に急速に普及した。電気釜、洗濯機、掃除機・冷蔵庫などの普及が市民生活を大きく変えてしまったことに象徴されるような大衆社会状況がはじまったと考えられる。」[36]

とにかく『海辺の光景』が書かれた日本の時代背景そして作家自身の個人的な生活環境はすべていわゆる**戦後の終わり**の機運を想わせていた。敗戦後はすべての日本人、特に安岡章太郎と似たような戦時下体験をした若者たちはそれぞれ苦しい時代を生き抜いてきた。みんなはそれなりの違った個人的な戦後を送りながら、共通した不幸や傷跡、つまり敗戦後遺症があったと思われる。個人的には、安岡章太郎にとっての敗戦の傷跡は、自分自身の重病や父親の戦場からの不名誉な帰還や母親の発狂に求められただろうが、広い意味においての敗戦後遺症を安岡章太郎は母親の発狂という形においてシンボリックに表現したと云えよう。そして、たまたま母親の死という安岡の個人的な戦後の終わりが高度成長のはじまりという日本国民全体の戦後の終わりと重なり合ったところで、この『海辺の光景』という作品のインパクトが感じられよう。

しかし、どうもこれは安岡章太郎の思いこみにすぎないというような感じだった。結局母親の死だけで、そう簡単には自分のこころの中の戦後の亡霊が消え失せることにはならなかったようである。

8．壮年時代（戦後亡霊の到来・戦中時代と戦後時代との二つの世代の継続と断絶の間）

日常生活の安定化

前述のように、戦後十何年かが過ぎた頃、安岡章太郎は芥川賞を取ったことによって作家として文壇で認められるようになったし、経済的にも家庭的（結婚して長

35 同上、53頁。
36 島居邦朗『鑑賞・日本現代文学・第28巻・安岡章太郎・吉行淳之介』角川書店、1983年、20頁。

女が生まれるなど）にも安定した。特に安岡章太郎にとっては1954年という年は、色々な意味において自分の“心の戦後”から抜け出し始める年であった。この年の４月には平岡光子と結婚したし、７月頃にはようやくカリエスも完全に治り、コルセットをはずした。これについて本人は言った、「ろくに治療らしい治療もせず、ここまでよくなったのは生来頑健な質のせいか。**とにかく私の“戦後”はこのへんでおわったらしい**」。1956年には東京都玉川尾山台にローンで建てた家に移り住んだ。1957 年に母親は故郷高知の精神病院で息を引き取った。この出来事について彼は、前述のように、後から出した『海辺の光景』では、母親の死によって**すべてのことは終ってしまった**と言っている。この点について安岡章太郎は『家族団欒図』の主人公「私」を通して次のように述べている。

「かんがえてみると、終戦以来どうやら私が自立してやって行けるようになるまでの十年間、どんなふうに活きつないできたのか不思議でならない。乞食と泥棒とはしなかったようなものの、ほとんどその一歩手前のところまでは何度も行った。戦後の混乱期に巻き込まれて私たちは苦しんだが、あのような混乱期でなければ出来るはずもないことをやったからこそ、きょうまで生きのびることが出来たともいえる。**とにかく死にたくはない一心の無我夢中ですごした十年間だったそしてトリトメのないどろどろの生活にどうやら恰好がついてきたころ、疲れはてた母親は廃人同様の姿で死んで行った。ちょうど「“戦後”はおわった」という声が、あちらこちらで聞かれはじめたころである。**」[37]

その頃安岡は37歳になっていたが、同世代の元学徒兵たちも皆おそらく社会的に安定していただろうし、当時の日本経済高度成長の原動力にもなっていたことであろう。そして安岡章太郎は日本社会における戦後の終焉や生活向上の現れのことについて『家族団欒図』でも次のように表現した。

「たしかに“戦後”はいつとはなしに終っていた。コウモリ傘が八十五年に一本の割で配給されるだろうとか、東京の街には数十万の餓死者が出るだろうとかいった話は、いつの間にか伝説にすぎなくなり、あのころには夢としか想えなかったような事態が現実のことになってしまった。現に私自身、結婚し、父親になり、一戸の家をかまえているが、こうしたことは脊椎カリエスで身動きもならず膿と垢まみれになって寝込んでいた当時の私には想像もおよばぬことだった。」[38]

しかし、そんな安岡章太郎の安定したところへ、ある日突然“戦後”がやってきた。

戦後亡霊の到来・二つの世代の継続と断絶の間

妻を先に死別されて寂しくなったからか、とにかく父親はある日突然田舎の高知から安岡の東京の新宅へ身を寄せてきた。鶏を飼ったりするという戦後からのイヤ

37 12に同じ、「家族団欒図」247頁。
38 同上、247頁。

な趣味も治らないまま父親は居座り続けるので、我が家では緊迫感が高まる。しかし妻から父親の再婚の提案が出されたとき、父親はすぐにその案を受け入れ、1959年に再婚して高知にもどった。安岡章太郎はまたこれで自分の戦後が終ったと思った。

実際に起きた以上の流れが『軍歌』と『家族団欒図』という二つの短編小説の主題となった。この二つの作品が被さり合うような形でできているが、『軍歌』の方は父親が尾山台の宅にいた一時期を描いたのに対して、『家族団欒図』は父がその家の玄関に現れた時点から家を去って再婚する段階まで簡略にとりあげているわけである。『家族団欒図』では父親という招かれざる客がやってきた状況が下記のように述べられている。

「**ある日、突然“戦後”がやってきた。**郷里のK県から父親が上京してきたのである。(中略) しかし父が私たちといっしょに生活しはじめるとなると、やはりあらゆる意味で突然の変化をともなわないわけには行かなかった。(中略) **父が一人加わると急に足の踏み場もないほど狭苦しくなり、私は家の中で仕事がしにくくなった。**(中略) **そんな父を見ると私は、忘れかかっていた“戦後”が亡霊のように父のまわりに漂いはじめるのではないかと思うのだ。**」[39]

また、父親がこの家で息子の家族と生活をしはじめると色々な形の衝突が生じた。

「(父は) あくまでも熱心に作業をつづける。“自給自足”、“欲シガリマセン勝ツマデハ”そんな標語が禿げ上がった赤黒い額のなかに滲みこんでいるみたいだ。(中略) 誰が何と云おうと、**この家の主権者はオレなんだぞ。**(中略) これまで女房のそだった環境は父とあまりにちがいすぎる。つまり軒下四尺五寸の庭にも芝生をつくりたがったり、物干場を白ペンキで塗ったりするのは女房の趣味であり、その傍らに急造の、むしろゴミ溜然としたトリ小屋をもうけて玉子を生ませたがるのは父の行き方である。」

以上の描写を読むと、ここでは安岡章太郎は何か大事なメッセージを送っているかのように見える。**父親はまるで“あの戦争”を起こした世代、いわば敗戦までの軍事体制の残党かのように見えていて、いまだにしぶとく旅立ちをしようとする戦後世代に足枷(あしかせ)をしようとしている。**しかし、「私」と「女房」という戦後世代はその父親のことを邪魔で足手纏いだと思い、共存することは到底無理だと困り果てる。戦後第三世代にでも当たる2、3歳の娘を健康的な環境で育てるにもどうにかして“過去”という重い荷物を片づけるべき、と。しかし、これは果たして簡単にできるものなのか、というメッセージではないかと思う。**“過去”をまったく突き放したところで果たして新しい世代は気楽に新しい旅立ちができるのか。それとも、“過去”というものを自分の宿命だと受け止めてそれを背負って進んでいくべきなのか。**これは安岡章太郎がこの二つの作品に託したメッセージであ

39 同上、249〜253頁。

り、決して父親の再婚でこの課題が解決されたとは思えない。『家族団欒図』の最後の場面で、中華料理屋の玄関の鏡に映った、**父親そっくりの「私」の顔はやはり、イヤでも父親の顔そっくりで、父の世代が起こした諸々のことの責任を背負いながらこれから先も進んで戦後の長い道のりを歩み進まなければならない**、というメッセージなのではないであろうか。

結　論

以上述べたように、**安岡章太郎の 11 年の間に書いた初期小説、つまり自分が文壇に登場した 1951 年からだいたい 1962 年の『軍歌』の発表までの作品においては、彼はシナ事変から日本経済高度成長の初期までの 30 年間に及ぶ自分の自伝、言い換えれば“自分の昭和史”を書き綴った**のである。同作家のあの有名な回顧録集『僕の昭和史』（１、２、３）を読んでもだいたいこの 30 年間の出来事を中心に回顧録が書かれていることに気づく。敗戦後に、正確に言えば 1948 年か 1949 年あたりから安岡章太郎が小説を書き始めたとき、ちょうど彼は脊椎カリエスでギブスのコルセットを胴に巻き付けられたままでほとんど身動きの取れない状態であった。敗戦がもたらした諸々の悲劇や無秩序に加えて、自分の健康上の無能力が相重なったとき、おそらく彼は計り知れないほどの精神的な葛藤に悩まされ、沢山の疑問を抱いたことであろう。最初からすべてを整理し直して少しずつ自分の置かれている状況が自覚できるだろうということで、遡って物心ついてからの記憶を呼び起こしてそれを小説に書き綴りはじめたのであろう。**物心付いた頃は、だいたい自分が５、６歳のときであろうから、ちょうどそれは 1925，6 年、つまり昭和期のはじまり**なのである。こうして植民地朝鮮の時代から自分の自伝を語りはじめる。そのころから彼はほとんど、職業軍人だった父親が留守勝ちのため母親と二人で戦争の緊迫した空気の中で生活を送っていく。そして、安岡は結局自分と自分の「悪い仲間」みんなが学徒兵として軍隊に駆り立てられて内地や外地へ配属されていく。安岡の場合は外地で実戦もしないまま脊椎カリエスに罹り内地の陸軍病院を転々とまわされていく間、戦場で自分の大隊の仲間がほとんど戦死していった。生き残った自分はある種の自責の念に駆られてしまう。ここまでの 15 年の分と、戦後の日々の糧をめぐる苦しみ、脊椎カリエスとの闘病、捕虜となった父親の戦場からの不名誉な帰還、母親の発狂とその死、経済的なゆとりの普及の機運とともに自分も東京都内で自分の新しい家族と小さなマイホームをもうけること、父親が再婚することまでの各過程を代表する数多くの小説を書いたが、それらの小説を一度、以上並べた展開の順番で読み直した場合は、**首尾一貫の長い自伝の奥に伏せられた同世代の若者や日本社会の 30 年の精神史めいたものが浮かび上がってくる**ような気がしてやまないのである。

安岡章太郎の初期小説の一連の作品に介在したものは、安岡章太郎が**次の世代に**

伝えようとしたメッセージであり、後世に残そうとした彼なりの「昭和史」で同世代の精神史の記録でもあったのではないかと思う。

参考文献

○安岡章太郎編著『僕の昭和史１』講談社、1991 年。
○安岡章太郎編著『日本文学全集 51』河出書房、1971 年。
○安岡章太郎編著『安岡章太郎全集１』、『安岡章太郎２』、『安岡章太郎３』岩波書店、1986 年
○吉田春生『安岡章太郎・遁走する表現者』彩流社、1993 年
○安岡章太郎（その他）『安岡章太郎・群像日本の作家 28』小学館、1997 年
○西野孝男編集「安岡章太郎の世界」『別冊新評』第７巻第１号（通巻第 18 号）新評社、1969 年。
○島居邦朗『鑑賞・日本現代文学・第 28 巻・安岡章太郎・吉行淳之介』角川書店・1983 年。
○杉本和弘「安岡章太郎の〈アメリカ〉・初期小説を中心に」『名古屋近代文学研究』16 号、1998 年、12 月、171 頁。
○松原新一「安岡章太郎における戦後の意味」『国文学・解釈と鑑賞』37、２号（通号 461）、1972 年、２月、90 頁。